



罪と罰と慈愛と、多分我儘

ミュー

「ようこそ。サー・スレイン・トロイヤード。」

目隠しを外された目に飛び込んできたのは、克蘭カインの冷笑だった。地球の極秘施設から随分長い旅路を拘束具と目隠しでがんじがらめにされていたスレインは、光源が目には刺さり顔を顰めた。椅子に拘束されて身動きができないスレインの数歩前から、克蘭カインがその様子を見下ろしている。

「懐かしいでしょう。父の揚陸城です。」

目だけを動かし見渡すと、ここはいつか、アセイラムともに地球を眺めたテラスだった。床面に地球が透けて見える。

「あなたが生きていることが、どうしてわかったか教えてあげましょう。」

コツコツと、克蘭カインが踵を鳴らして室内をゆっくり歩く。冷たい笑みを浮かべる克蘭カインは、薄気味悪いほどの甘い声で話し出した。

「アセイラム女王が、あなたに並々ならぬ感情をお持ちだったことを知っていたのでね。処刑されたと聞いてわたしは心の中で喝采を送りました。悲しみに暮れる陛下を

お慰めして、私たちの愛はより一層深まり、夫婦として新しい生活を送っていくことができるよね。」

克蘭カインは首を振った。

「しかし女王陛下はそれほどの悲しみを受けているように見えなかった。本来であれば、それは喜ばしいことなのですが、どうも腑に落ちない。悔しいが、あなたが陛下にとってつまらない存在だとは、認められなかったのですね。」

遠ざかった克蘭カインの背中を、スレインはじつと見た。その真つすぐな背筋と冷たい怒りが立ち上る背中とは、彼の父親によく似ている。

「わたしは、カマをかけたのですよ。」

このテラスで、アセイラム女王に降りかかった様々な責務や苦言、平和には程遠い地球や火星の現状、戦時中の思い出などを語り、私の忠誠を示したのですよ。そう告げる克蘭カインの声は甘かった。吐き気がするほどに。

「女王陛下はお優しい方だから、私がお心を慰めるうち、一言こぼされた。」
克蘭カインは振り返った。もう笑ってはいなかった。冷たい表情の中、その青い

瞳に浮かぶのは憎悪だ。

「スレイン、とね。」

このテラスで、地球を見て。

スレインは目を伏せ、口輪の中の奥歯を噛みしめた。ぎり、とかすかに音がした。「あなたが生きていると確信しました。」

克蘭カインは、大股でゆっくりスレインに近づく。声が、奇妙な朗らかさを持つてしんとした室内に響いた。

「地球連合も、あなたを持って余っていたようですね。あなたを引き渡すよう交渉したら、すんなり通りました。」

克蘭カインは、スレインの拘束された椅子の前で立ち止まった。小首をかしげて言った。

「一人の軍人を除いてね。」

その言葉に、スレインはぱつと顔を上げた。その碧の瞳を、青い瞳が冷たく見下ろした。

「界塚という男は、最後まで応じようとしませんでした。あなた、彼とはどういった関係なんですか？」

克蘭カインが、スレインのあごを掴んで引き寄せる。吐息が感じられるくらい顔を近づけた。スレインの肌がぞわりと粟立った。

「先の星間戦争の英雄。女王とも懇意の間柄だとか。地球での後見人のような立場だったそうですね。随分あなたに執心でしたよ。わが身惜しさに、その顔で誑かしたわけですか。この期に及んで命乞いとは見苦しい。」

つ、と瞼から顎先までを撫でられ、スレインは逃げるように身じろいだ。克蘭カインはけらけらと笑う。

「どこにいても、やることは同じですね。浅ましい地球人だ。」

唐突に真顔になって、克蘭カインはスレインの口輪を取った。

「何かしゃべりますか。」

スレインは強い視線で克蘭カインを見上げた。嚙んで血が滲んだ唇が小さく開いた。

「：姫様は、このことは。」

バチン、と音がした。頬を打たれたスレインは、バランスを崩し、椅子ごと倒れた。その頭を、克蘭カインが踏みつける。

「女王陛下と呼びなさい。いえ、呼ぶ必要もない。あなたがここにすることは知りませんよ。」

克蘭カインの手が、スレインの髪を掴んで引つ張った。もう一度、強く頬を打つ。「あなたはこれから、女王陛下のいるこの揚陸城で飼われるんです。どんな気分ですか。」

近づいた克蘭カインの顔に、スレインはつばを吐いた。克蘭カインがスレインの頭を床に叩きつける。首に手をかけ力を込めた。スレインの口から、うめき声が漏れる。

「躰がなっていないですね。」

扉が開き、そろそろと青服の兵士が現れる。目隠しをされて、スレインは数人の兵士に羽交い絞めにされた。

「あなたがどういう立場が、教えてあげましょう。」

真っ暗になった視界の中、クランカインの声が冷たく響いた。乱暴に押されて、どこともわからない場所へ連れて行かれるのを、スレインは不思議とほっとした気持ちで受け入れた。

途中でぐるぐると回されたり、角を戻ったりしながら、方向感覚を失わされてたどり着いた扉の中、スレインは口輪と手枷と目隠しをされたまま服を剥ぎ取られて柱のようなものに縛り付けられた。兵士たちが出て行き、扉が閉まる音がした。

「ふうん。地球では、大量殺戮の罪人を随分丁寧に扱うんですね。傷一つ、痣一つないとはね。」

長い指がゆっくりと体中を撫でまわす。視界を奪われた中与えられる刺激に、スレインはびっくりと体を強張らせた。その様子を見て、クランカインが声を上げて笑う。

その指が、執拗に胸の古傷をなぞった。

「この、そこら中についている古傷は、誰がつけたのですか。」

爪をたてられ血が滲む。スレインの口から、小さく呻き声が漏れた。

「父ですか。」

ぎり、と爪が食い込み血が滴った。ぱん、と音がして、スレインの頬を克蘭カインの平手が打った。

「上書きしないといけませんね。新しい飼い主は誰なのか。」

目隠しを取って、額が触れ合うほど近くで克蘭カインは笑った。口元を歪ませて、歪んだ笑みを顔に浮かべる。

「不幸ですね。あなたも。」

そして克蘭カインが噛みついた首筋から、血が滲んで流れ出た。噛みちぎられるか、という強い力に、スレインは思わず悲鳴をあげる。

「うあつ、あ、あ。」

「うるさいですね。」

がん、と固いもので横面を張り飛ばされて、口の中に血の味が広がった。見ると、克蘭カインの手にはステッキが握られている。あまりに見覚えのあるそれに、思わずそのステッキと持ち主を交互に見比べた。大きく振りかぶったステッキの握り手が、今度は側頭部に当たる。スレインの額から、だらだらと血が流れ落ち床に血だまりを作った。続けざま、頭にガンガンと振り下ろされる。

「はあ、が、あ…。」

「何を大袈裟な。慣れているでしょう。」

そう言つて克蘭カインは、ステッキを操作して形状を変化させた。ひゅつと風を切る音がして、次いでばちん、とはじけるような音がした。鞭がしなり、青白い体に真つ赤な跡が蛇が這うように次々と残った。

「うっ…、く、あ、あ…。」

「お前のせいで、お前のせいで、お前のせいで。」

克蘭カインは、体中が真つ赤に腫れあがり、痣だらけ傷だらけ血だらけでぐつたりと吊られるスレインの縄をほどいた。床に崩れ落ちて横たわったスレインを蹴飛ば

して、克蘭カインは馬乗りになつて首を締めあげる。スレインの喉から、くぐもつたような声が漏れた。

「お前のせいだ……！ あの方は、わたしを……」

克蘭カインの怨嗟の声と暗く燃える瞳に映る自分を見て、スレインは早く殺してくれればいいのに、と思う。

「お前さえ、いなければ……」

ぎりぎりと締め上げる両手に抵抗することなく意識を手放そうとした矢先、解放された。はあはあと息を切らした克蘭カインの下で、スレインは力なくせき込んだ。

「いや、殺しません。死ぬなんてあなたにはもったいない。死ぬより辛い生が、あなたの罰ですよ。」

ステッキの柄をがつと口に突っ込まれて、スレインは苦しさにえづく。切れた口内からだらだらと血が落ちた。

「もう奪われるものは何もないと安心しているでしょう。なら、あなたを破壊してあげましょう。」

シウル、と衣擦れの音がした。スレインは、混濁した意識の中で克蘭カインの声を聞いた。

「あなたの、中身をね。あの方が分かなくなるまで壊してあげましょう。」

その一室は、小ぎれいに整えられていた。シャワー室と給湯室、大きめの寝台、そしてクローゼット。その部屋で、克蘭カインはスレインを責め、罵り、凌辱した。スレインは、特に抵抗することもなく、それらを受け入れた。そして、克蘭カインの気が済むと、クローゼットの奥にある隠し戸の中へスレインを放り込んだ。世話をする人間はいない。汚れ、傷つき、ぼろ雑巾のように打ち捨てられ、放置される。そして克蘭カインが扉を開けると、シャワーと食事を強要され、一通りの残酷な仕打ちを受けた後、またクローゼットの奥に放り込まれる。

そんな日が、どのくらい続いただろうか。

昼も夜もなく、動物のように扱われる。人格とか、尊厳とか、そういったものを徹底的に破壊してくれるこの場所は、しかしスレインにはひどくふさわしく思えた。だから受け入れる。意識や尊厳、美しい思い出や感情を理不尽に奪われることも、引き裂かれ砕かれ磨り潰されるような苦痛を与えられることも、もう見ることもない光や未来を突き付けられることも。

暗いクローゼットの奥の密室で、素肌で石畳に転がりながら、スレインは閉じた瞼の奥で思考する。早く、こんな正気など失ってしまえばいいのに。

ここに来てから、あの男のことをよく思い出す。

冷たい地下で、差し向かいに座る男。幼く見える面差しに不釣り合いな軍服と眼帯を身に着け、雨のにおいをさせていた少年。彼の目を奪ったのは自分だ。ただ一つ残った瞳の瞳はいつもじつとスレインを見た。その瞳の温度は、冷たくはなかった。

あの場所は安全で、何も奪われないし何も与えられない。そして、途方もなく静かだった。彼はスレインの前に座り、ただそこにいた。伊奈帆は、何も奪わなかった。

何も与えなかった。そして、ただそばで、同じものを共有していた。

スレインは、暗闇の中声を上げずに笑う。あばらが痛んで、数度せき込んだ。痛みは慣れている。この場所は自分に似つかわしい。でも、やけに耳の奥がうるさく感じる。うわんうわんと、耳鳴りがする。地球にいたときも感じた耳鳴りは、あの男が来るようになってなくなった。

なんと得難い存在だったろうと思う。でも、もういい。伊奈帆から離れることができて良かった。彼は、光の中にいる。できればそこに留まり、人並みの幸せを感じて生きてほしい。自分にまきこまれて、闇の中へ引きずり込んでしまいたくない。

遠くで、小さな電子音がした。クランカインが来たのだろう。時間の感覚が曖昧だが、随分早いように思う。これから行われる行為を思い、スレインは重い瞼を開けた。

一方その頃、揚陸城のエマージェンシー音を最大にして、一機のシャトルが滑り込

んでいた。けたたましいサイレンの中、侵入者は揚陸城のウエルドックを走り抜ける。侵入者は、界塚伊奈帆だ。ピストルを右手に、アナリティカルエンジンを左目に、通用品を駆ける。

克蘭カイン伯爵がスレインの存命を知り、瞬く間にスレインの身柄は伯爵の元へ移された。地球軍への申し入れの際、最後まで抵抗した伊奈帆だったが少尉という階級では火星を統治する伯爵に張り合うことなど到底できなかった。

そして今現在、伊奈帆は界塚ユキを頼り、鞆戸孝一郎を頼り、マグバレッツ艦長を頼り、カームや韻子に頼り、シャトルをはじめ様々な面倒を預け、事ここに至っている。損得ではなく、ただの厚意に甘える形で。

遠い日の、シャベルと土の感触を思い出す。そのぎりぎりとした感触と冷たさを、思い出す。もうあのころみたいに、一人で戦う必要はない。大切なものが、伊奈帆には増えた。そして、大切な人たちの大切な人になったことを信じられる。

自分が、こんなに人を信じることができるとは。背中を、弱みを、覚悟を、預けることができるとは。

それは多分、セラムのおかげだ。そして、彼女の願いを形作ったスレインのおかげだ。だから、黙ってなかったことにすることなんてできない。スレインは、すでに伊奈帆にとって個人的に干渉せざるを得ない対象だ。それを差し引いても、セラムに預かった願いを、セラムとして最後に願った彼の救いを、こんな形で反故にされてはたまらない。

「どこに、いるんだ。」

狭い通路を抜ける。左目のアナリティカルエンジンが、伊奈帆の問いかけににこえるように電子音を立てた。

連絡通路を駆け、T字路を左折した瞬間、現れた人影と鉢合わせた。身構える伊奈帆の前で、白い布が翻った。

「伊奈帆さん？」

その声に、姿に、呼吸が止まった。

「セラムさん？」

目の前に、かつての火星のプリンセスが一人で立っていた。あの時と同じ白いドレスを着ていた。胸の前で握られた左手の薬指に、リングが光っていた。

「アセイラムです。」

少し大人びた表情の彼女は、肩を竦めてはにかむように微笑んだ。

「アセイラム女王。ご壮健で、何より。」

伊奈帆は、敬礼の姿勢をとった。アセイラムは、小さくひざを折り、それに応えた。この場には不釣り合いなやり取りだった。アセイラムが、不安そうな表情で伊奈帆に聞いた。

「伊奈帆さん。どうして、ここにいますか？ 侵入者が現れたと聞きました。まさか、あなたがそうなのですか？」

伊奈帆は、唇の前に人差し指を立てた。

「内緒に、してください。」

「え？」

「僕を、見なかったことに、してくれませんか。」

アセイラムは伊奈帆の言葉に眉を顰めて数秒考えたのち、聞いた。

「でも、それでは、何をしているのですか。」

言った瞬間、アセイラムは、はっと表情を強張らせた。

「ここに、スレインがいるのですか。」

こんな時だけ、察がいい。詰め寄るアセイラムを左手で制した。アセイラムは目の前の伊奈帆の左手を両手で強く握った。

「彼の様子がおかしいと思っていました。よく、姿が見えなくなって……。何か、何を考えているのかわからないところがありました。」

彼、というのは彼女の夫だろう。交渉の際、一度だけ話をした。その瞳に宿る暗い憎悪を思い出す。

——殺しません。先延ばしにしている罰を与えるだけです。——

「彼は死にました。あなたは、ここにいて。」

「嫌です。私も行きます。」

アセイラムが、伊奈帆の腕を掴んだ。伊奈帆は、その腕を事務的に外す。そして、厳しい声で言った。

「駄目だ。」

伊奈帆の冷たい様子に衝撃を受けながら、それでもアセイラムは縋りついた。

「どうして!? 一体、何があったのですか。スレインは、地球にいるのではなかったのですか。」

城内には、警告音が鳴り響いている。ばたばたと、足音があちらこちらで聞こえる。早くしなくては。

「あなたは、知らない方がいい。」

伊奈帆は、アセイラムから2歩下がって、半身を翻して言った。

「私も行きます。この揚陸城は、わたしのほうが詳しいですよ。」

引くつもりはないアセイラムに、言いたいことはいくつもあった。この事態に自ら関わる危険性とか、地球と火星の関係とか、小さな恨み言とか、いろいろ。でも、全

てのみ込んで、伊奈帆は一つ言った。

「…ひどいものを見ることになる。後悔しますよ。」

「伊奈帆さんは、後悔しないのですか。」

間髪入れずに、アセイラムが言った。3歩分の距離で見つめ合う。瞳は、逸らされなかった。

「わかった。一緒に行こう。」

多分、自分も、後悔するだろうし、傷つくだろう。でも、何もしいではいられない。スレインは、伊奈帆にとって失うことができない存在になりつつあった。アセイラムにとっては、ずっと以前からそうだったのだ。

「こっちだ。」

地球連合軍少尉とヴァース帝国女王は、連れ立って走り出した。一人の地球人を探して。

「こんなところがあつたなんて……」

結局、伊奈帆が先導して揚陸城内の一室にたどり着いた。鍵もかけていない簡素な扉の内側は、華美ではないが美しい調度で整えられていた。ソファとローテーブル、そして大きな天蓋大きなつきの寝台が配置されていた。寝台は整えられているが、その木製の柄に細かい傷や染みを見つけ、わけもなく胸がざわつく。

「あまり、じっくり見ない方がいい。」

伊奈帆の言葉に、アセイラムは視線を伊奈帆の背中に固定して、足早についていく。
「ここだ。」

伊奈帆がクローゼットの扉を開ける。中にはもう一つ扉があり、その横の電気錠に伊奈帆はコードを接続した。

アナリティカルエンジンが稼働する音が響く。いくつかの電子音とのやりとりの後、伊奈帆がキーを操作する。

小さく音を立てて、扉が開いた。

真つ暗な室内は、ひやりとしていた。饅えたようなにおいがする。ほんの数歩歩けば行き止まりの小さな空間だった。アセイラムが、小さく悲鳴を上げて後ずさった。

「どうして…。」

立ち尽くすアセイラムを一瞥して、伊奈帆は足を踏み入れた。そのまま数歩進み出る。それはまるで、いらなくなつて放り投げられた人形のように転がっていた。投げ出された手足はもう枝のように細くて、床に散らばる髪はからみもつれて汚れている。青白い裸の体中にこびりついているものが何かわからないほど、もう子どもじゃない。膝をつき、その汚れた肌にためらいなく触れて、伊奈帆は聞いた。

「僕が分かる？」

かすかに身じろいで、長くなつた髪の間から虚ろな翠が覗いた。伊奈帆の顔を確認して、青白い唇が震えるように動いた。

「…なんで来た。」

まだまともな意識があったことに安心して、伊奈帆はほっと表情を緩めた。軍服の上着をかけてやり、肩を抱いて上半身を起き上がらせる。以前から痩せ細っていたが、さらに痩せた。骨格が目立つ体についた痣や傷、こびりついた血や体液で顔も体も無残な姿だった。顔にかかる長い髪をかきあげてやる。スレインは、痣と血だらけの顔をゆっくりと伊奈帆に向けた。その顔を見て、伊奈帆は言った。

「迎えに来た。」

「…馬鹿だな。」

「まあね。」

汚れるから離せ、と小さく言った彼の肩を、伊奈帆はぼんぼんと叩いた。スレインは意識をはつきりさせるように小さく首を振って、顔を上げた。目が、開いたままのドアの光源へ自然と引き寄せられる。

「…ああ。」

スレインの瞳がアセイラムの姿を映した。体がびくりと跳ね、わなわなと唇が震える。

「姫様が。」

信じられないもの、昼間の幽霊でも見たような顔でスレインは言葉を落とした。逸らすこともできない翠の2対の瞳は、その全てが大きく波打ち揺れた。

「スレイン……。どうして……」

消え入りそうな声にあつたのは、戸惑いと怯え、そして隠しようのない生理的な嫌悪だった。

「セラムさん。」

伊奈帆が左側に振り返った。アナリティカルエンジンが音を立てる。伊奈帆は、声を出さずにそれと会話した。ここに、向かっている。早くしないと。

「もう、僕らから離れた方がいい。帰ってくる前に。」

「それを、したのは、誰なのですか。」

アセイラムが恐怖で目をいっぱいに見開いて、スレインを見る。瞳から大粒の涙が

ぼろぼろとこぼれ、床に染みを作った。

スレインは、固く目を閉じてうなだれている。愛する人に、彼女の夫に凌辱された体を見られている。その事実には伊奈帆は唇を噛んだ。

克蘭カインは、という呟きは、震えていた。両手で頬を包んだアセイラムはがたがたと震えている。膝が震えているのか、ドレスの裾がさざ波のように波打った。

「私に触れた手で、あなたをこんな目に？」

スレインの体が小刻みに震えだす。

「どうして……」

かつて恋をした人。美しい思い出をくれた人。そんな二人は、もう一生、そばにいて幸せになることはできないのだ。

「彼が生きているということは、そういうことです。」

伊奈帆が淡々と告げた。

「事前に防ぐことはできなかったが、予測できた事態だった。これから、別の人間によつて同じようなことが何度も繰り返されるかもしれない。」

伊奈帆はアセイラムを見た。左目が微動だにせずアセイラムの姿を映し出す。

「あなたに、その覚悟はありますか。」

「私は…。」

途方に暮れたようなアセイラムに、伊奈帆は続けた。

「耐えられないのなら、こいつを自由にすればいい。救いを求めるなら、絶望を耐えなければいけない。」

「…スレイン。」

スレインはがたがたと震えていた。床を掴む指は爪がはがれて血が出ている。感情の読み取れない双眸から、水滴がこぼれ続けていた。涙というには、悲しすぎる雫だった。

「…。」

ガチガチと奥歯を鳴らして、じつと耐えている。死ぬより惨い時間が流れる。伊奈帆は、肩を抱いた手にぐつと力を込めた。

「私は、あなたを救いたかった…。」

アセイラムの声が聞こえる。静かで、悲しくて、どこか虚ろな声だった。

「でも、私の願いが、あなたを不幸にしているのなら…。」

アセイラムが首を振る。逆光の中立ち尽くす彼女の影が、スレインの指先まで伸びている。その影に触れることすら恐れるように、スレインは不器用に手のひらで床を掻いた。

「もう、いいのです。」

祈るように手を組み、涙を流して許しを与えるアセイラムは、まるで聖母マリアのようだと伊奈帆は思った。優しく、思いやり深く慈悲深い女王。しかし、彼女は聖母マリアではない。弱い、少しずるい、恋に夢見て愛を謳う16歳の少女であつたはずだ。彼女は、恋も愛も知つたが、砕かれた。他ならぬその恋する人、愛する人によって。

「それでも、忘れないでください。スレイン。」

アセイラムが、ふらつく足取りでスレインに近づく。しゃがみこんで、伏せたスレインの顔を覗き込んだ。スレインは固く目を閉じる。

「私は、私の心は、あなたに預けたのです。あなたのことを、いつまでも思っているということ、忘れないで。」

アセイラムは、床を掻くスレインの手に、こわごわと自分の手を重ねた。スレインが弾かれたように顔を上げる。間近にアセイラムの顔があつて、スレインの体がしゃくりあげるように跳ねた。

「…あ、…ひめ、さま…。」

アセイラムは、悲し気に顔を歪めて、それでも精一杯微笑んだ。スレインの手を両手で包む。似た色の、二対の瞳が交錯する。

「私は、不幸ではありません。不幸になることはありません。私は、ヴァースの女王なのです。人々を、幸せに導く責務があります。私の幸せは、多くの人々の幸せともにあるのです。」

だから、とアセイラムは目を閉じる。睫毛にたまり零れた涙は、スレインの指先に落

ちた。

「だから、あなたが私を傷つけることはできないのです。あなたは、不幸の連鎖から離れることができるのです。」

そつと手を放して、アセイラムは立ち上がった。慈悲深く見える顔で、スレインと伊奈帆に微笑む。しかしそれは慈悲ではないことを、今の伊奈帆は知っている。

「だから、もうお行きなさい。」

そう言つてアセイラムは、優雅に振り返り扉から出て行つた。翻るスカートの裾は、汚れていた。

「行こう。」

伊奈帆は、スレインの腕を肩に回して、立ち上がった。嗚咽を漏らす彼の肩をぐつと抱いて、歩き出した。

「…どうして。」

揚陸城を出発したシャトルの中で、人形のように力なく座ってたスレインの声が聞こえた。

「何。」

伊奈帆は、シャトルの操縦をしながら答える。自分でもびっくりするくらい、優しい声が出た。

「どうして、殺してくれない。」

スレインは、死人のような顔で座る隣人を見る。伊奈帆は、ゆっくりと一度瞬きをした。

「僕は姫様に死ぬことを許された。お前は どうして僕を殺さない。」

シャトルに乗るとき、アストロスーツに着替えた。いまだに体中が汚れていたが、服を着て外部の刺激を感じるにつれスレインの虚ろだった瞳は輪郭を取り戻していったようだった。それは、ひどい現実を認識することでもあったけれど。

「スレイン。」

伊奈帆は、自分にできる一番丁寧な発音で彼の名前を呼んだ。スレインは、じろりと伊奈帆に視線を送る。

「僕は、君に生きてほしいんだ。これは僕の勝手な希望だけだね。」
軌道に乗ったことを確認して、操縦をオートにする。伊奈帆は、スレインに向き合った。

「君のためじゃない。だから、君の願いを僕は聞き入れない。僕は僕の感情で、勝手に君のそばにいる。」

困惑を顔中に浮かべて、スレインは伊奈帆を見返す。人工的な光の中で、汚れた髪や顔が古い人形のように無機質に映る。しかし、彼は人形ではない。生きて、呼吸をして、心臓は動き、感情のある一人の人間だ。スレインが悲痛な顔で伊奈帆へ詰め寄る。「なんで。…僕はもう、生きている意味も価値もない人間だ。」
つぶやいた彼の両目に暗い影がよぎった。ひゅつと喉がなった。

「そんなこと、君が決めることじゃない。僕にとって、君の生存は大いに意味があるんだ。」

伊奈帆が、メインモニターに目をやる。スレインもそれを追って眺める。そこには、青い星が映っていた。

「君がいなくなったら、僕が、ひとりぼっちになってしまうだろう。」

その声音にあつたのは寂しさだったように思う。スレインは、伊奈帆がこんな風に話すのを聞くのは初めてだった。

「英雄なんて都合のいいことを言ってるけれど、みんな怖いんだ。人殺しが。」

星間戦争の立役者。英雄。軍神。生ける伝説となった隻眼の軍人は、まだ16歳の人間だ。

「居場所がないのは、僕も同じだ。だから君は僕と一緒にいてよ。」

家族も、友だちも、仲間も、いる。でも、孤独だ。それは、伊奈帆の背負ったものを理解することができず、共有することができないからだ。

たった一人。たった一人だけだ。伊奈帆と同じ大きさの荷物を抱え、同じ景色を見ている人間は。この隣に座る、やせぎすの、顔色の悪い青年だけなのだ。

「…馬鹿じゃないのか。」

そのたった一人は、呆れたようにつぶやいた。伊奈帆は、彼の存在に安らぎを感じて微笑んだ。

「そうだね。馬鹿で、寂しがりの子どもなんだ。そばにいてよ。」

伊奈帆の言葉に、スレインはそっぽを向いて押し黙った。

「∴。考えておく。」

しばらくして聞こえてきたかすれ声に、伊奈帆は頷いた。

「うん、いい返事だ。」

青い海が、雲の切れ間から覗く。彼と一緒になら、どこにだって行ける。眼下に横切る渡り鳥の群れを眺め、伊奈帆は操縦を切り替えた。いつかこうやって、スレインと一緒に海を、空を、川を山を飛んで行く日が来るといい。まだしばらくは、あの監獄が彼の傷を癒すというならそこにしよう。操縦桿に添えられた指先は、とんとん、と機嫌よくリズムを刻んだ。

罪と罰と慈愛と、多分我儘

発行日 2025 年 6 月 11 日

著者 ミュー

<https://www.pixiv.net/member.php?id=955950>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
